



箕づくりの伝統を今も

変わらない思いとともに

北原 國男

聞き手・北佳苗 紙谷麻未 (石川県立羽咋高等学校1年)

自己紹介

僕の名前は北原國男です。生年月日は昭和12年1月19日や。家族は、今は二人です。生まれは、その時は、北邑知(おおち)村の菅池やったんかね。今は合併して、羽咋市菅池町やね。この家には、生まれた時からやから、はや77年住んどる。

子どもの頃

子どもの頃は、雪合戦とか、スキーで滑ったり、雪だるま作ったり、まあ、それぐらいの遊びをしとった。そして、スキーも竹で作った。スキーやってん。そりとかみんな竹で作ってん。そして、竹で靴をはくような形をしたスキーを作るんです。今は、木のスキーやけど、その時は、竹で細工して、火であぶって焼いて、今度は竹をまげて細工したということです。

子どもの時は道も今とちごうて、大変高低があったということです。今は、こういう時代やから、車が来ればどんならんでしょ。それに、そんなときは、道がひどい、勾配がはやかかったということです。

そして、竹のスキーはここに住んどるその時代の子どもたちが伝統的に誰んかもしたということです。それからゴムや、木のスキーができたから、作る人が少なくなったんかもしれん。そして、今では、市販に売っとるのがあるし、わざわざ山行って竹とって作る人はいないです。

子どもころの思い

子どもの頃、箕(み)作りの手伝いなんて、全然そんなこと、子どもの頃は遊ぶがなが仕事やった。

僕らの時にこの地区は、神子原地区つちゅうて。千石、神子原、菅池の3部落で学校があったのです。ほしたら、その同級生が30人ほどおったんです。その頃は、中学校までは親の仕事の手伝いはしないげん。まったく。ただ親のしと

るのを見ることはあったけど、しないもので、中学校を卒業してから親の後を継いでやったんです。

けれど、子どもの頃は先の夢はでかいもん持っとして、それにぶちまけて農業をしたのです。はじめから、農業したいとは思わんわいね。やっぱり、菅池に住んでなれば都会と違って、そんな大きい企業おらんし。僕らの時代やと、自動車もないでしょうが。

でも、ものづくりは、子どもの頃から好きやったし、それに、遊びをするときに自分で作らなきゃ、人は作ってくれんでしょう。

箕とは？

箕とはだいたい百姓用の農具です。持つところがあって、物をもって運んだり、物を入れて乾燥させたり。そういう品物ですよ、箕というものは。

箕作りの伝統を受け継ぐ

箕作りはだいたいこの部落の特産物として作ってるんですよ。その時分は、この部落が、50軒ほどあって、箕をつくる人が6、70人おりました。

仕事は16歳から始めた。16歳から習って、で、学校は、春卒業式でしょ。4月から、田んぼして。田んぼもその時分は、馬で田んぼした。そして、冬場には箕作りをしました。昔、仕事は、父さんと僕でしとった。それからみんな寄ってしたのが2、3人。近所の人が2、3人寄ってしたんや。今、作業は夫婦2人でやとる。

びっくりするでしょうけど、仕事は10年前までは、約11時間やとったわ。朝、大概8時頃から昼12時頃までした。そして、昼ご飯食べて6時半までした。それから、6時半から、夕ご飯食べて1時間程度休んで、また10時まで納屋に行つて、仕事です。今はそんなにしないです。だから、11時間労働になります。でも、いまは知らんぞ。体がつい



ていかんからな。

箕1個作るのに大小8種類あるから、大体1時間かかる。そして、8種類あるなかで、やっぱり大きいものが一番手がかかる。

1日にできる箕の数は、若い時ならもっと作れて、今で1時間に1枚ずつなら、8時間すれば8枚やし。3時間すれば3枚やし。体の調子があるもので、それと年がいけば8時間労働も今では勤められん。

箕の仕事は納屋の中でしとった。広さは畳10枚分の10畳や。箕の仕事は汚くて、家でやったらほこりがたつて掃除するがたいへんで、納屋では秋にそこで稲作業した後で仕事しとる。

そして、箕はだいたい10月あたりに売れる。

箕の危機

プラスチック誕生と機械化のダブルアタック

そしたら、昭和30年、40年前やろうね。プラスチックというのがはやってきたの。そしたら、安くて使いやすい、そのプラスチックの箕に消費者が急増するでしょ。そういうときに、みんな手作りの箕への注文をやめたの。プラスチックの箕ちゅうのは高岡に機械で作とるもので、機械にポコポコとおこして、3万を超えとる。

そしたら、そういう品物と僕らの作る品物とじゃ、品物と生産あわせれんです。結局、そうして、この部落の人も生産あわせれんで、ほとんどやめてしまったの。昭和40年ぐらいやったかね。だから、手作りの箕が結局、機械化に負けたということです。

民芸の箕、誕生!!

そのうちに今度はね、農業も機械化で、箕ちゅうもんを作らんでも機械であげてくれるようになったのです。つまり、使わなくなったのです。そうして、いま、箕を作る人が1人になつても、売るところに困るし、売れなくなったんです。

そしたら、関西で大阪の間屋さんのほうから、こういう品物を作ってくれないかといって来られたのです。見習つて、民芸のみを作るようになったんです。神社に初参りにいったら、売とる中に面が入ったりしとるようなもんを作るようになったの。民芸品です。

そして、この民芸の箕を扱とる商人は日本中に2軒です。この民芸の箕ちゅうもんは、関西では御札の代わりに飾とるんです。そして、兵庫県の西宮神社が本場なんです。

農業用の箕は、一番最盛期になると8万枚程送とったんや。昭和の初期時代やから。それが、だんだんプラスチックが出てくるときに、プラスチックと相撲とって、プラス

チックが勝ったのです。民芸箕は5千枚。これが、なぜ動くかっていえば、縁起物やから1年に焼いてしまうもの。だから、新規新規に神棚の御札も、1年1年入ってくるでしょうが。あれと一緒に。だから、大体枚数が一緒ほどいるっちゃうこと。ただし、景気によって今みたいにデフレな時代は、消費者が景気が悪いから小さいものへ、去年でかいもん作っても、今年は景気が悪けりゃ、小さいものへ転ぶっちゃうこと。

箕作り、第二の危機

こういう箕を作る生産者というものはこの部落では1人や。この隣の部落いけば、富山県やけど、そこへいったら何人も箕を作る仕事を家族でしておられる。家族って言うても若いもんはしていません。それは、材料が問屋から入ってくる材料なら、まだする人はおるかもしれん。けども、材料は自分で採ってこんと出きん仕事やもんで、山行くのは、体がつらいついていうか。

後継者はおればいいけど、どこいってもおらん。材料を自分で寄せてこんならんでしょ。そうすると、山を歩いたりする後継者はいないっちゃうこと。山を歩いてでも、人の後を歩けばなんもないでしょ。その日むだになる。そうすると、むだな仕事をするより1日くらいって賃金制にしとけば生計を立てやすいから。箕仕事をする人がおられんです。

材料を採るのもなかなか難しいのよ。やっぱり、箕を作るのに対して、ただ採っても作れんの。その材料採りから習わんと。そうじゃないと、品物作るのにひまがかかるの。悪い材料もつてくると、採算とれん。例えば、簡単にいえば、木でも大工でいえば、まっすぐな木をもってきたとすれば仕事しやすいでしょう。曲がった木をひいた場合はまた元の木の癖が出て柱が曲がっちゃうこと。

また、いいもん採ろうかと思えば、なかなかないし、作ってある品物ではないから。その自分の思う通りの材料を寄せるのに日が、日数がかかる。

それから、箕を作るのも難しいよ、その1年に品物作られっかっていうと、作られんよ。ちょっと修行してかからにゃ。大体は藤がくっついて太刀を叩かれん。その箕を作ったとき、藤をオサへひっつけて、箕は、また組んで叩いて締めんなげん。だから、1年ぐらい修行しんと作られん。金になる物にはなりません。

山での苦勞

それはやっぱ、経験を積んで一人前になるので、なぜかっていえばあんたらも一緒にやと思う。藤を切りに行くがんにしてみれば、楽なところで採りたいっていうのは人間の本能やぞ。酷いところへ入らんは谷の奥まで入れば、藤はもつ



て出てこんなんから。そうして、楽なところは誰んかも採とって、そういうがんに、楽なところで採ればこんたあ、材料は悪くなるっちゃうことや。先に人がいいもん採ったあとやからな。

箕の素材の採集時期

素人考えではいつとっても箕を作れるっちゃう考えがあるでしょう。

それがその色といい、商品やから、色がいいものを作らにゃあかんということです。

それはなぜかといえば、水の下がったとき、材料をとらにゃ、虫がつくの。又、八専っていう時期があるの、1年に4べん。その時期に、物を収集したものはぜんぶ虫がつくの。なんによらずやぞ。百姓が作つとる大根によらず、ごぼうでも野菜類やて、みんないっさいその八専ちゅうのをはずして採集しんと虫がついていかんの。すぐ消費してしまうものは使えんですよ。生魚なんていうのは、今とって近い間に処分する。それをこんたあ、塩分で加工するから虫がこんていうことや。

八専っていうのは曆に書いてあるの、八専に入ったとか。八専の場合は材料がとれないです。その1日だけ除くっていうものではなくて、12日間あるの。今切った材料になんによらず、たとえば、木でもいいちゃ、細い木でも切って、それを来年の4月ぐらいまでおいておけば虫がついてぼろぼろになるのです。

箕作りの素材

箕作りの素材は、竹と木と藤。藤は藤の蔓を切って、竹は矢竹っていうんや。木はアカシヤっていう。それはたらせんよ。肥しをやれば太るけど、肥しのいらんもんやと思えば

細いもんができる。逆に肥しをやれば、大きくて使い物にならないです。

矢竹は奥能登の山で採る。田んぼと違って、指定場所ってのはないです。

1回採ればそれで10年ほど採れんわけやて、竹でも藤でも。一緒な。山へ何べんも入れないです。藤が太くならんから、竹なら次の竹が出てこないもんで。

矢竹の量はだいたい、100貫、400キログラムくらい。時期は大体10月から11月入ってから。同じく藤もそうです。木もアカシヤもそうです。材料は大体10月から11月で出荷するちゅうわけや。箕の出来上がりはとってくる材料によって良い品物をとってくれば、いい品物ができます。悪い品物やと手数料がかかる。時間がかかる。

採集時期があってその色が違うのです。商品の色です。新しい箕ちゅうたら、きれいな色しとるもんですけど、材料が悪いと中の藤が赤みがかつとったりするから色が悪いもんができる。だからなるべく使わんようにしとるんです。その本当のいい時期に採った物は黄色く仕上がるんです。それから悪い時期に採ったもんな、色が黒味をさすのです。

材料のいいもんはやっぱりきれいな品物ができる。竹でも材料のいいもんは強いものが出来ます。

箕を作る時に難しいのは、材料採りが一番難しい。材料の品質の良いもんを採ってくれないと出来んから。

それから竹でも大きさが皆一緒でも、塩でもまれて雨風に耐えて育った竹が作業しやすいです。山の林に出とる竹は仕事しにくいてことです。

箕の道具

箕を作るときに使う道具は第一はオサダケ、ヨシダケ3本、ミタチ（箕太刀）。刀のかっこうしとるから、仕上げるときに紐を通さんならんもんで。こんな持ち手を編む、箕とじ針っていうもんもある。竹を選別する機械がある。また、竹をうすく引く機械があります。

ベルトハンマーっての昔、鍛冶屋にも使っていた。藤打ちは、ハンマーに電気を利用して動かすんです。昔は手槌で叩いた。今は機械化になったから。あと鉋、鎌ちゅうもんは、木を切るときにいる。木を切ったり藤を切ったり竹を切ったりするとき使う。

鎌はこころ辺のものは切れ味が悪うてだめです。普通の物は10分切れれば、刃を研がんと切れんが、高知県の土佐の高い品物を買うと半日使っっても切れるということです。それで、土佐の鎌ちゅうたり、大阪の堺のものを使うんです。

道具は1代に2本ほど使っている。今現在使ってるのは2本目や。16歳から今まで買い換えずに30年はつかつとるわいね。



消費者からの苦情

消費者からの苦情は大体どういういいか、いっぺん勝負の品物やから。今、農耕用の品物なら作業で使って、ここが悪いとかの苦情があって、いつもかも苦勞の連続や。

それから、売る者と買う者は1銭でも安く買わな儲けられんやろ。それから、作る人は1円でも高くほしいから。それは、互いに駆け引きがあるということです。だから、高いゆうて苦情があった。そして、あんたの品物は悪いから単価をまけてくれとか、例えを言えば、こっちは100円欲しければ95円でなければいりませんとか、向こうの買う者はそうである。だから、品物のいい物を作らなければなりません。

それでも、良かったことと言えば今まで箕をしとって、怪我もなくこんだけの年まで出来た。それだけが良かった。

それから30～40年前は、この部落は一村として作つとったから、品物の良いのと悪いのがあったわけや。まとめてだすと、そういう、品物が悪いって苦情がくる。そしたら、だんだん、その悪いがん作る人は遠慮してもらわなならんから、段々悪い物作るひとは箕を作らなくなるのです。

箕作りの現状

今では、年がたって、大量生産が出きんから、どんどん作ってくれていわれても限度があつて作られません。後継者もなかなかできないので。こんな材料採ったりいろいろする昔みたいな仕事、誰も好まんもんで。何もかも材料集める、織るのももちろん自分の手でするから。

いくら無形文化財になつても市が世話して売ってくれるわけじゃないさかい、作る、売るは自分の腕次第。

氣多大社で、正月、箕が売つとるけど、その箕は網代組みになつとる。網代組みは、竹ばかりで作つとる。そればつかが神社で出とる。うちの箕は作る人が限られとるもん

で、そんなにないからこっちの方には回ってこない。関西の方について、兵庫の神社の方へいったら一番あるわ。それで自分が作った箕がどうやって売られとるかを見てきました。

そしたら、店の人が、「この箕は生産者が減ってしまって、ないから、貴重なものなので年を取っても作ってください」といわれました。

PROFILE

北原 國男 きたはら くにお
昭和12年1月19日生・77歳・箕作り

北邑知村菅池（現在の羽咋市菅池町）に生まれ。邑知中学校を卒業後、16歳のとき、家で田んぼの手伝いをしながら、冬に箕作りの仕事を手伝い始めた。その後、プラスチックの箕などの出現や山での材料採集でさまざまな苦労を経験する。そして、現在は関西へ、関西の方では縁起物として有名である民芸の箕を作り出荷しておられる。日本で数少ない箕の製造者ということとても尊い存在である。



● 取材を終えての感想 ●

今回、北原國夫名人に取材をさせていただくなかで、箕作りという尊い伝統文化技術を受け継ぎ、日々精進されている名人の姿に感動したのと同時に、箕作りの伝統文化技術の危機の現状を知り、とても悲しく思いました。

けれども、そんな状況でも、名人はしっかりと前を向き、箕作りと今も真剣に向き合い、大事な伝統文化技術を受け継がれていました。そのような、名人の熱い眼差しやお話をされる姿から、決して諦めない心と、真っ直ぐに箕作りにかける思いというものを学ばせていただきました。

名人をはじめ、聞き書きに関わっていただいた方々に心より感謝申し上げます本当にありがとうございました。（北佳苗 写真：左）

箕作り名人、北原國夫氏の取材をさせていただき、その記録を通して、私は北原さん夫婦あってこそその箕の伝統だと思いました。私たちを優しく迎え入れてくれ、親しみのある笑顔が印象的でした。

そんな北原さん夫婦も、箕を作る人が少ないことがとても寂しそうに感じられました。でも、そのことに負けずに夫婦で箕を支えている力強さがあり、また、箕を作る事に生きがいを感じているんだなと思いました。

自分たちの作った箕を誇らしげに見せてくれたお二人の笑顔がいつまでも続いてほしい！！と強く思いました。

最後に、このような北原さん夫婦と、箕の伝統に出会わせてくれた方々に感謝します。

ありがとうございました。（紙谷麻未 写真：右）

